

Q： 外部電源が喪失したことは判りましたが、どうして復旧に 9 日間も要したのですか？(3 月 20 日午後 4 時外部電源と通電確認)

A： 地震で鉄塔が崩壊し、送電線が切断され外部電源が喪失した。非常電源は全て津波で壊滅または水没。従って外部電力の回復に全力を尽くしたと思う。

鉄塔を建て直すりわけではないのだから、応急処置で取り敢えず通電するだけの工事がこれほどかかったのは、地震で障害物がありすぎて工事が難行したのか。放射能汚染で外での作業が難しかったのか。

福島第二原発は地震、津波とも第一と同じように被害を受けたが、奇跡的に炉心融解という最悪の被害は免れた。その違いは全電源を喪失した第一。第二は辛うじて一部電源が生きていたという幸運によるものか、更なる幸運は第二には東京電力と東北電力からの二系統あったが、第一は東京電力だけの一系統だった。これは設計の段階で決まっていたそうだが、危機管理の認識があれば双方の電源を確保しているだろうが、その認識はなかった。だが、第一原発には東北電力からの電源があった。それは原発建設期間中、地元東北電力から工事用の電源として敷設したもので、工事完了後はそのまま放置してい、活用はしていなかった。

事故後、その事に気づき東北電力からの工事用外部電源ケーブルに接続しようとしたが、容量も不足しており、活用するには時間がかかるとして、再び放棄された。

もし、if は許されないが、外部電源として東電の新福島変電所からの系統と並んで東北電力の系統を整備していたならば最悪の炉心融解、水素爆発、放射性物質の放出は回避出来たかも知れない。

さらにもう一つ、安全対策を怠った事実が判明した。10 月 23 日朝刊、東電が福島第一原発の全電源喪失を防ぐため、2006 年に 1～6 号機を電気ケーブルで繋いで電源を融通しあう改良工事を検討しながら、技術的な障害を理由に見送った経緯があったらしい、この当時には既に貞観地震、津波も明らかになっており、当然東電内部では検討課題だったのですが、実質的な検討までは至ってなかった。

第一原発では 5～6 号機は互いに連携しており、唯一残った 6 号機の非常用ディーゼル発電機 1 台で原子炉の冷却は出来た。その後応急措置として地面をあわせた電気ケーブルで 1～6 号機と連繫したのが 4 月 25 日、もし、06 年の時点で改良工事を推進していれば事故は防げたかもしれない。

元東電幹部によれば、06 年、自然災害などで電源を失って過酷事故に至る事態を避けるために、電源設備を増強する計画が練られたという。

構内の南側の 1～4 号機は互いに電気ケーブルで繋がっており、電源を共有していた。北側にある 5、6 号機の間でも繋がっていたが、1～4 号機と 5、6 号機の間には繋がっていなかったため、これを改良工事で鉄塔を建て電線を架設する計画であったが技術的な問題もあり断念した、とあるが、おかしいと思うのは電力会社が技術的問題というのはどう

